

## 優秀賞

### まだ遠いチャレンジ

秋田県鹿角市立十和田中学校

3年 高橋 七星

私がチャレンジしたいこと。これは今すぐこうしたい、ああしたいということではないが、私のはるか先にあるものだ。20歳になると、人はお酒が飲めるようになる。私は5年後20歳になる。大人になったら、どこかお酒の飲めるお店で、父と二人でお酒が飲みたい。それが私のチャレンジしたいことだ。

なぜなら、私の兄や姉たちは父と外でお酒を交わしたことがないからだ。私は、兄姉がなしえなかったことを父にしてあげたいのだ。私のこの夢がかなうのは今から5年後である。一昔前は20歳が成人の年とされ、社会に出て大人の世界の厳しさを知っていたが、今は違う。法律が変わった今、私たちは2年早い18歳から大人として、社会に出ていくことになる。社会に出て2年もたてば、仕事も安定し始めたころだろう。そして、仕事が安定してお給料がもらえるようになれば、父の行きたいところに連れていける。これこそが私の考える親孝行の形である。

私は今、訳あって父と二人暮らしをしている。父は強い性格で、その性格が顔に出ている。そのため、周りの人からの父の第一印象は怖い人だと思われることが多い。しかし、実際はそんなことはない。父は自分のことを後回しにしても、相手のことを思いやる。気遣い上手な人なのだ。そんな父と私はよくぶつかる。父の気遣いが「ありがとう」や「うれしい」からいつしか「うざい」や「ほっといて」に変わっていった。何気ない一言やくだらない言動でお互いがお互いに牙をむくようになり、3日間、口を利かなかったこともある。しかし、こんな状況でも、父はご飯をちゃんと作ってくれた。どんなときでも私のことを気にかけてくれた父を喜ばせたい。父が喜ぶような親孝行をしたい。

父は体調があまりよくない。来年の6月に父は62歳になる。父は私に「普通のお父さんたちはもっと若いのに、お父さんはこんなんでごめん。」と言ってくる。こういうとき、なんと答えたらいいのか分からなくなる。本当は「そんなことないよ。」と言いたいのだが、うまく言葉にできない。それと、「俺の死期は近いかもな。」とも言う。それを笑いながら冗談っぽく言うから、笑い飛ばしてしまいそうになる。しかし、きっと冗談ではないから最近は優しく反応するようにしている。

父は死ぬ前にやりたいことがたくさんあるらしい。北海道に行ったり、海を見たり、おいしいものを食べたり、そして、そのたくさんあるやりたいことの

一つが、私とお酒を飲むことだ。しかも、お店のカウンターで。この夢はもう私しか、かなえてあげられない。だから私が夢をかなえるしかないのだ。

父からもらったお小遣いでお酒のつまみを買って、同じテーブルで私はジュース、父はお酒を楽しむこともできるだろう。しかし、そんなことをしても父は喜ばない。「子どもが親に気を遣うな。」そう言って突っ返されるのが関の山だ。だから私は早く大人になりたい。早く大人になって、自分の力で父に親孝行したいのだ。当たり前のように父に守られていた自分への恥じらいと、父への感謝を身に染みて感じている私で親孝行をしたいのだ。そうすれば、父が今までどんな思いで私を育ててくれたのかを理解することができるだろう。

父と二人、大人になった私がカウンターでお酒を飲むチャレンジを実現するために、私には今チャレンジしていることがある。まずは勉強だ。毎日の勉強を頑張り、高校に入学する。そして高校に入学したら、卒業して就職するためにも勉強を続ける。勉強をすることで、私の大きなチャレンジにまた一歩近づくチャンスを、つかむことができるのだ。次は父に「ありがとう」と言うことを意識している。父と一緒に居られる時間は、思ったよりも短いのかかもしれない。だからこそ、私は日々の小さな出来事でも「ありがとう」と伝えることを大切にしたい。私はあと何回、父に「ありがとう」を伝えられるのだろうか。勉強と「ありがとう」の両立をし、5年後、父に最高の親孝行を届けられるよう、毎日一つ一つ、チャレンジを積み上げていく。

私が夢をかなえたときの父はどんな顔をしているだろう。カウンターでお酒を飲む父の横顔は一体どんな顔をしているだろう。何を食べて、何を飲み、何を話すのだろう。そして私もどんな話をして、どんな表情をしているのだろう。父とは今まで二人三脚で頑張ってきた。つらいときも、楽しいときも、うれしいときも、どんなときも父がいた。だからこそ、5年後の親孝行は最高のものにしたい。少し遠いチャレンジのために、私は今日もチャレンジを積み重ねていく。